

# 生徒の「主体的な学び」を促す中学校美術科の題材開発と実践

Development and Practice of the Junior High School Art Department to Encourage Students to  
“Independent Learning”

堤 祥晃  
Yoshiaki TSUTSUMI  
高島市立安曇川中学校教諭

新関 伸也  
Shinya NIIZEKI  
滋賀大学教育学部教授

<キーワード> 美術科 主体的な学び 題材開発 材料と身体 主題と造形要素

## 1. はじめに

中学校の美術科の授業は、一般的に「作品を作る時間」というイメージが強い。これは、作品を作る行為そのものや完成作品が楽しく魅力的であることが理由かもしれないが、作品完成ばかりに注力してしまい、美術教育の本質を見失っている事例を多く見かける。一般的に「美術科は何を学ぶ教科なのか」と問いかけると、技術的な指導内容ばかりが返ってくることが多い。この傾向は美術科教員も例外ではなく、「美術の授業＝作品を作らせる時間」と捉えている教員も少なくない。その様な中で、展覧会や実践発表の場では、教師が手順や構図をマニュアル的に示して描かせたことが推測できる題材を少なからず見かける。確かに教師がお膳立てをし、材料や技法を指定してマニュアル的に取り組ませ、適切な技術指導を行えば、それなりに完成度の高い作品を作り出すことができる。

しかし、幼児造形や図画工作科、美術科の授業は「作品を作り出すこと」が目標ではなく、活動を通して様々な事を学ぶことを目標としていることを考えると、子ども一人ひとりが自ら考えたり、表現を工夫したりといった活動が保障されなければ、必要な資質・能力を十分養うことはできない。これは、学習指導要領で図画工作科や美術科の授業が「造形的な視点をもとにして感性を育み豊かな情操を培う」ことが目的であると示されていることから、作品を作ることを最終目的とはしていない。いわゆる児童・生徒の「主体的な学び」を保障する題材や指導法が求められているのである。

本研究では、子どもたちの行う表現活動を作品として形にすることを最大の目的とするのではなく、活動の中で発見し、感じたことから、様々なことを考えたり技術を習得したりする「学びの場」と捉え、その過程を重視したいと考えている。

今回の研究では、その様な視点から授業を見直し実践を試みてきた（図1.）。

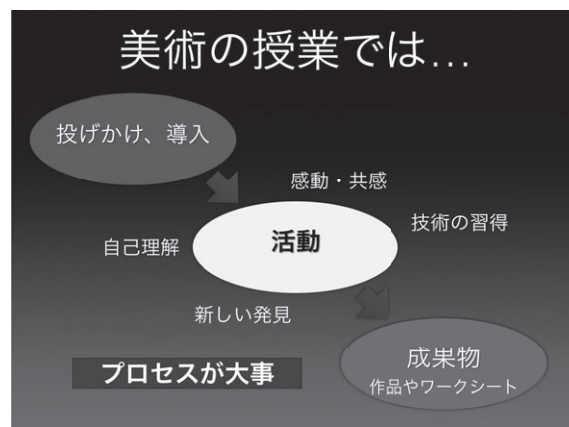


図1. 美術科の学習活動と学び

## 2. 研究の概要

美術科で養う資質・能力として「中学校学習指導要領（平成29年告示）」では「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」と目標に示されている。具体的には、造形的な視点から表現活動を創意工夫し、主題を生み出しながら豊かに発想したり、構想を練ったりできるような授業が求められている。そのような授業を行うためには、材料や技法に頼った作品づくりではなく、造形行為そのものを楽しみ、材料に触れて感触を確かめながら試行錯誤するなどの活動が必要である。これらの経験を基にしながら、主体的に活動しつつ主題を生み出していくような造形活動を構成することが肝要となる。これらの考えを踏まえ、本研究では生徒が「主体的な学び」ができるように次の3点を重視した題材開発と実践を行った。

- ① 絵の具や粘土などを単なる材料として扱うのではなく、感触や変化を感じながら「身体感覚」を伴った表現活動に繋げる。【①材料との身体的関わり】
- ② 体験を基に主題を生み出したり、まず材料に触れて造形的な活動を体験し、そこから主題を生成したりするような活動を取り入れる。【②体験的主题生成】

- ③ 導入段階で色や形など造形要素と表現内容の関係性を探るような活動を取り入れる。【③造形要素の意識化】

### 3. 実践年度・対象校

- ・2013年度～2019年度
- ・大津市立志賀中学校／高島市立安曇川中学校

### 4. 美術科題材による実践

#### 4-1. 題材①『ソルトアート』（1年生）

《実践年度 2013 年度～2019 年度》

##### (1) 題材の概要

『ソルトアート』は、砂を使った「造形遊び」の実践からヒントを得た題材で、黒画用紙で作ったトレーに入れた食塩を、ゆすったり、トレーをたたいたり、指や道具でかき混ぜたりしてできる偶然の形から発想を広げ、主題を生み出す授業である。塩の持っているザラザラ感と指や棒などでできる凹凸によって独特の面白い表情（テクスチャー）が生まれ、表現することの楽しさを素直に味わうことができる。



図 2. 塩のテクスチャーを生かした作品

また、塩の白と画用紙の黒のコントラストが美しく、見るものを魅了する（図 2）。中学生の授業で扱うには稚拙な印象を与えてしまう題材だが、活動の中で生徒に様々な発見や気づきがあり、共感したり協力したりしながら制作している様子から、生徒は活動の中で多様なことを学んでいたに相違ない。

##### (2) 授業展開と生徒の様子

最初に簡単にやり方を実演すると、すぐに取り組みに入りたい様子がみられ、材料と用具を渡すと即座に活動に入ってしまった。色々な道具ややり方を試そうとする生徒、うまくいくまで何度もこだわってやり直す生徒、アイデアを出し合いながらクラスメイトと一緒に取り組む生徒など充実した取り組みの中で、「すごい！」や「それ、どうやったの？」などのセリフが飛び交い、楽しみながら発想を広げている様子であった。当初 1 時間だけの短期題材として取り組む予定であったが、生徒の授業継続の要望が強く、加えて 1 時間増やして授業を行うこ

とになった（図 3.）。



図 3. 「ソルトアート」の表現

#### 4-2. 題材②『人生の花』（2年生）

《実践年度 2016 年度～2019 年度》

##### (1) 題材の概要

題材『人生の花』は、自分の人生を花に例えて半抽象的に描くというもので、様々な道具を使って水彩絵の具の多彩な表現の可能性を追求しながら、思い思いの花（人生）を自分らしく表現するという題材である。この題材の大きな特徴は、表現活動に入る前に材料や技法に楽しく触れながら、色や形と感情の関係性を探る活動を取り入れていることである。ここで、絵の具の表現の多様性と楽しさを十分体験させることで、生徒の表現の幅を広げることができる。また、アイデアスケッチではなく絵の具を使った試作品（習作）を描きながらアイデアを練らせる点も工夫点である。

表現活動の場面では、生徒に対して「行為しながら考える」というねらいを明確にした。そのため生徒は行為から発想したり、活動の中で主題を明確にしたりする様子がみられ、アイデアが思い浮かばなくて手が止まってしまう生徒はほとんど見かけなくなった。また、周りの友達の表現に触発されてどんどんイメージを広げていくため、自然と会話が生まれ交流する中で「対話的な学び」が生じやすい。また、半抽象的な表現では、技法や表現の面白さが強調されるため、相互鑑賞の時間には描画技術に優劣にあまり捕らわれずに互いの作品の良さを認め合うことができる。

##### (2) 授業展開と生徒の様子

###### ①導入

導入段階では題材の内容は伝えずに、1 時間目は「絵の具の可能性」というテーマを与え、刷毛やローラー、スポンジ、歯ブラシ、ストロー、綿棒など様々な用具を準備して色々な技法を試す時間にした（図 4.5.6.）

過去にモダンテクニックの演習として似たような取り組みを行ったことはあったが、今回は多少の不安はあったものの、教師の実演や技法の説明は一切なしで、全てを生徒に委ねるようにした。生徒は最初、恐る恐るであったが、10 分も経つとかなり活発に取り組むようになり、

教師の想像以上に多彩な発想と表現が生まれていた。生徒達の自由な発想に感心するとともに、教師の指導という名の下に、どれほど教え込んでしまっていたのかを痛感した時間でもあった。



図 4. 指で直接描く

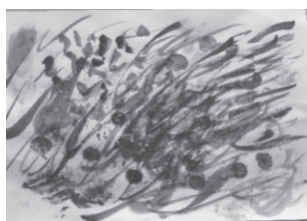


図 5. 表現を試す①

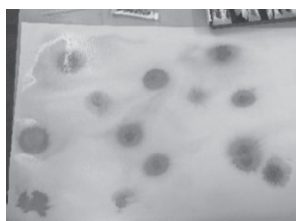


図 6. 表現を試す②

#### ②展開Ⅰ—感情を絵の具で表現する—

次の時間には前時の延長のような感じで、感情を色や形で表すというテーマを与え、あとは自由に活動させた。感情は嬉しい・ハッピー系、悲しい・落ち込み系、イライラ・怒り系、怖い・恐怖系の4種類を設定し、それぞれに合った色や形を考えるように促した。生徒達は、試行錯誤し、時には周りの生徒と確かめ合いながら、感情と色や形の関係を探っている様子であった。

#### ④展開Ⅱ—制作—

本制作に入る前に生徒全員にSMAPの歌「世界で一つだけの花」を聞かせた。上手い下手ではなく、自分らしい表現を追求してほしいことを伝えてから活動に入った。この題材は、「根を過去の自分、茎や葉を現在の自分、花を未来の自分」として描くという設定である。まずはワークシートに過去、現在、未来の自分についてキーワードを記入させ、その後、少し小さめの画用紙を渡し、絵の具で試作品（習作）を制作させた（図 7.）。その際に、伸び伸びと描けるように、極力鉛筆で下描きをしないように促した。同じ題材ではないので単純比較はできないが、アイデアスケッチを描かせていた時よりも行き詰る生徒は少なく、色々と試しながらイメージを膨らませている様子であった。また、一部にどうしてもアイデアスケッチを描きたいという生徒がいたため、スケッチブックに描くように指導した。

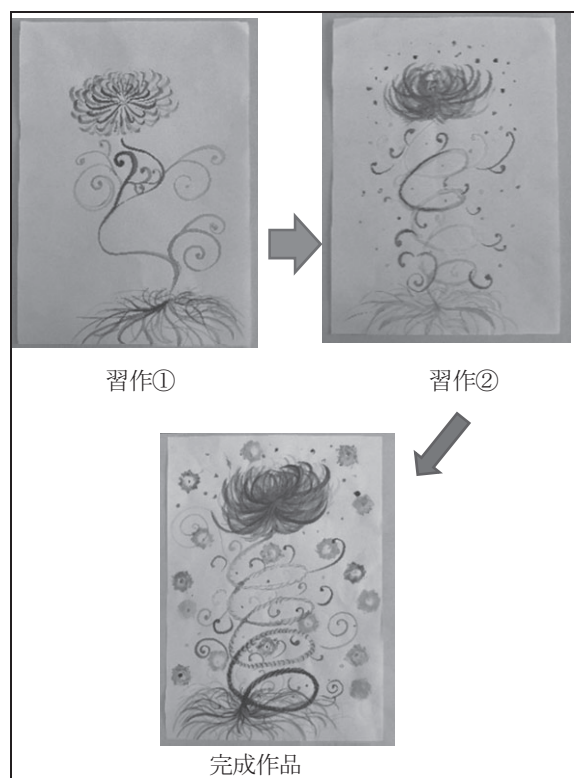


図 7. 完成までのプロセス

本番の制作は習作を基に描くため、イメージがつかみやすくスムーズに描ける生徒が多かったが、逆に画面が大きくなると構図のバランスが狂ってしまうケースや、緊張して習作のように伸び伸びと描けないといったケースも見られた。しかし、多少の課題はあったものの、大半の生徒が楽しみながら自分なりの表現を追求することができ、主題が明確となった（図 8.）。



図 8. 作品完成—主題の明確化

#### ④まとめ—鑑賞—

相互作品鑑賞の時間には、自分のクラス以外の他クラスの作品も合わせて2クラス分の作品を並べて、最も「イ



メージが伝わってくる作品」、「ユニークで面白い作品」、「共感できる作品」の3つの視点から作品を選定して感想を書かせた。制作の様子を見ていない他のクラスの作品には特に興味を示し、丁寧に鑑賞する姿が見られた。また、作者のコメントと作品を比較しながら意見を交わす姿も見られた。「人生」という少し深いテーマであったため、共感できるという視点では、「先生、共感できる作品がどうしても見つかりません」という生徒もあり、そのあたりの設定が難しいと感じた。

#### 4-3. 題材③『あの日、あの時、あの気持ち』（1年生）

《実践年度 2018 年度～ 2019 年度》

##### (1) 題材の概要

『あの日、あの時、あの気持ち』は、今までの生活の中の一場面で感じた「気持ち」を、粘土を使って抽象的に表現する題材である。この題材でも本制作に入る前に素材や技法に楽しく触れながら、色や形と感情の関係性を探る活動を取り入れ、粘土の素材を楽しみながら、表現と造形要素の関係性を十分探らせるようにしている。先の実践例『人生の花』との関連性については、これまでの指導経験から、抽象的な表現は平面より立体の方が取り組みやすいと感じており、1年生は粘土で立体作品に、2年生は絵の具で平面作品に表現させることにした。また、主題も1年生は日常の感情や気持ちを中心に発想し、2年生では少し深く掘り下げて、自分を見つめるという内容に設定している。

##### (2) 授業展開と生徒の様子

###### ①導入

本題材でも、導入段階では題材の内容は伝えずに、1時間目は「粘土でとことん遊ぶ」というテーマで素材と触れ合う時間とした。生徒は軽量粘土の素材の特徴と、ヘアブラシや木槌、タワシなど今まで粘土の造形では使用したことがない珍しい用具が興味を惹いた様子で、粘土の感触を楽しみながら思い思いの造形活動に没頭していた。また、粘土に絵の具を練りこむという活動も新鮮だったようで、単色だけでなく、マール状にしたり、ストライプにしたりといった工夫も見られた。

###### ②展開Ⅰ—感情を粘土で表現する—

次の時間も実践例『人生の花』と同じように前時の延長のような感じで、感情を色や形で表すというテーマを与え、あとは自由に活動させた。使用した感情は『人生の花』と同じく、嬉しい・ハッピー系、悲しい・落ち込み系、イライラ・怒り系、怖い・恐怖系の4種類を設定した。最初はほとんどの生徒が感情よりも様々な技法を楽しんだり、偶然できた形や色彩を楽しんだりしている様子であったが、徐々に意図を持って制作するようになってきた。深まりという面では不十分であったが、本制作につなげるという意味ではよい活動になった（図9.）。

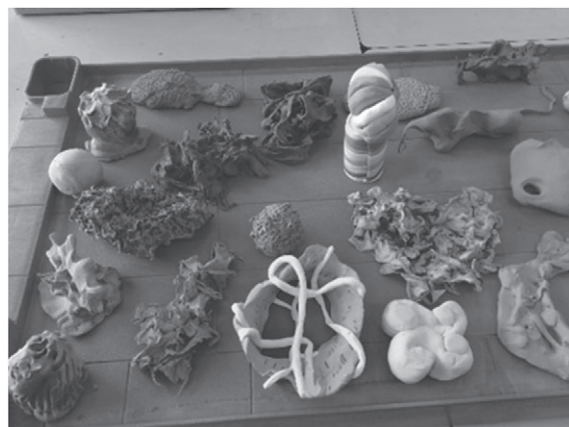


図 9. 粘土の試作品

###### ⑤展開Ⅱ—制作—

生徒に、生活の一場面の気持ちについて、具体物を一切使わずに色や形のみで表現するというテーマを提示した。また、ある程度の仮の主題を決めたら、後は粘土を触りながら考えていって後で変更しても構わないと伝えた。それは、実際に粘土を操作する中でイメージを固めていく方がスムーズに発想できると判断したことと、造形表現は思考判断と表現の間を行ったり来たりする過程で学びが深まるのではないかと考えたからである。結果的に生徒は粘土でアイデアスケッチをするように試行錯誤しながら制作を進めていった（図10.）。その際に沢山の試作品が生まれたが、その中に子どもたちの「学び」を読み取れるものが数多く見られた。早く制作が終わって「先生、もう一個作品を作ってもいいですか?」と云ってくる生徒もあり、全体的に充実した雰囲気が感じられる授業であった。

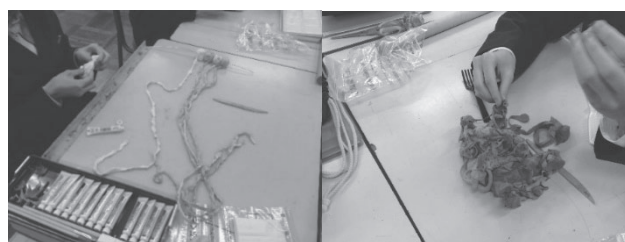


図 10. 試行錯誤を重ねながら、完成イメージを固める

###### ④まとめ—鑑賞—

本題材でも2クラス分の作品を並べ、「最もイメージが伝わってくる作品、ユニークで面白い作品、共感できる作品」の3つの視点からそれぞれ作品を選ばせて感想を書かせた。他の実践でも同じような相互鑑賞を行ったが、本題材が、一番鑑賞活動が盛り上がり、「これわかる～」や「これすごい!」「どうやって作ったの?」など、共感や感動しながら鑑賞している様子が見られた（図11.12.）。



図 11. 友が誕生日を祝ってくれた喜びと驚きを表した作品

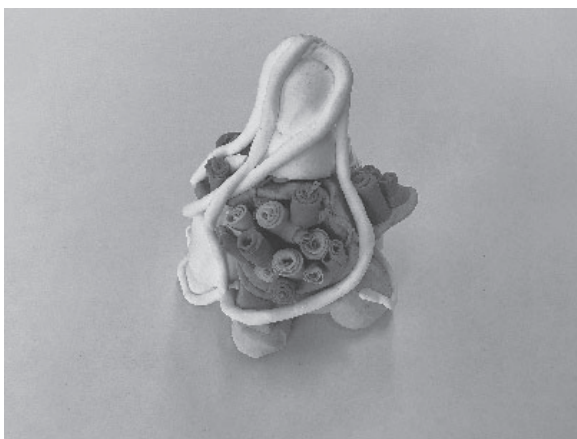


図 12. 中学校入学時の、期待と不安を表した作品

#### 4-4. 題材④『高島を PR する和菓子を作ろう』（3 年生） 《実践年度 2018 年度～ 2019 年度》

##### (1) 題材の概要

『高島を PR する和菓子を作ろう』は、粘土を材料にして地域の特色を PR する「創作和菓子」を制作する題材である。最初に、日本の伝統文化としての和菓子の特徴や魅力を学び、それをふまえて地域の良さや季節感を色や形を工夫して和菓子に表現することを目指している。「観光客が思わず買ってしまうような和菓子」をキャッチフレーズに、地元高島市ならではの内容を考え、見た目も美しい和菓子を作る過程で、自分たちの住む地域の良さを再発見することにもつながる。

本題材は美しく見栄えの良い和菓子を作ることをねらいとしているわけではなく、自分たちの住む地域に目を向け、地域の一員として社会参画するための手段として和菓子を作る。そのため、和菓子について知る活動や、自分たちの住む地域の特色を調べる活動に丁寧に取り組ませている。また、制作途中に 4 人グループで、ねらいにそって制作を進められているかについてアドバイスシートを使って確かめる活動を行った。和菓子を作ることだけが目的にならないように、アイデアを練

る、制作途中、鑑賞のそれぞれの段階で、生徒にいかにかえ、深めさせるかがポイントとなる。

##### (2) 授業展開と生徒の様子

###### ①導入

制作の前提として伝統文化としての和菓子の特徴を理解する必要があるため、和菓子（上生菓子）を知るという学習を 2 段階に分けて実施した。第 1 段階は、夏休みの宿題で上生菓子を食べレポートを書くというもので、五感を使って和菓子を「体験する」ところからスタートした。第 2 段階は、動画や写真を鑑賞して和菓子について理解するという活動で、4 人グループでの学び合いを通して学習を深めた。特に実際に和菓子を作っている動画では、和菓子職人の「こだわり」を通して小さなお菓子に込められた日本の伝統文化、職人の技、込められた思いなどが分かりやすく伝えられるものという視点で選定した。生徒はこちらの予想以上に興味・関心を持っており、早く制作に移りたい態度をみせていた。

###### ②展開—制作—

実際の制作では、アイデアスケッチがうまく描けない生徒もいるため、粘土で試作品を作りながら考えるという方法を提案した（図 13）。その結果、「アイデアを考える」⇔「作品を作る」という活動を行ったり来たりしながら制作している生徒が多く、その過程で主題が深まっている様子が見られた。比較的美術が得意な生徒の中には、しっかりとアイデアスケッチを考えて計画的に取り組むたいと言ってきた生徒もいたので、その際にはスケッチブックにアイデアスケッチを描くようにさせた。作品が小さいこともあり、ほとんどの生徒が時間内に作品を完成させることができた。また、早く完成させた生徒が主体的に続けざまに作品を制作しており、制作過程で様々なアイデアが生まれていたことがうかがえる。しかし、最終的に自分が気に入ったものに走る傾向があり、ねらいに沿って作品を作るということに関しては不十分な生徒がいたことも事実である。



図 13. 和菓子の試作品

###### ③まとめ—鑑賞—

最後に完成作品を並べ、相互鑑賞を行った。単に見栄



えが良いものを高く評価してしまわないように、「あなたが観光客なら買いたいのはどのお菓子？」という視点を与え、「当初の目標が達成できているか」というものさしで鑑賞させるようにした。生徒自身が制作段階でなかなかねらいに迫ることができていなかったこともあり、多くの生徒が、ねらいを達成できているかという点に関しては割合シビアに指摘していた。また、友達の作品の工夫点を見つける中で、色や形など造形要素に目を向ける発言や記述も多く見られた。今回の題材では、「地域の特色」と「季節感」という2つの要素を同時に考えなければいけないという点でハードルが高く、どちらもクリアできている作品は少なかったのだが、難易度が高かった分、制作過程での学びが多かったように感じる(図 14.15)。

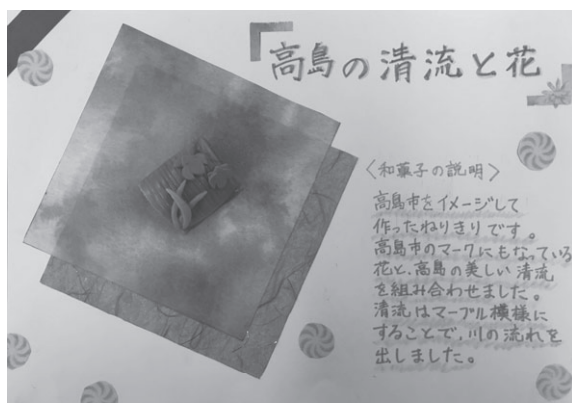


図 14. 生徒作品「高島の清流と花」

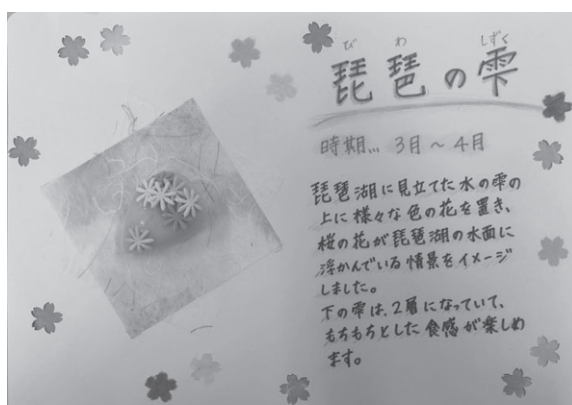


図 15. 生徒作品「琵琶の雫」

## 5. 成果と課題

本研究では「①材料との身体的関わり、②体験的主题生成、③造形要素の意識化」の観点から、題材開発を行い、研究を進めてきた。その成果として、述べてきた4つの実践題材に共通していたことがある。それは、授業中に発想や構想が湧いてこないなどの理由から活動が止まる生徒が激減し、楽しく主体的に活動する場面が多く見られるようになったことである。また、材料に触れて試行錯誤しながら表現を工夫しようとしている生徒も多く、主題と造形要素の関係を探りながら「表現したいこ

と」がより明確になっていく様子も見られた。

また、技能の優劣に捕らわれずに多様な表現のよさや美しさを感じ取れる視野の広さや柔軟性も育まれており、制作後に相互鑑賞を行った際に、ワークシートには「色の対比が面白い」「描き方の雰囲気が柔らかい」「他の人にはない感じが面白い」「線が太くて力強い」など、単に上手い下手ではない造形的な視点や自分なりの見方から作品を分析した感想が多く見られるようになった。

### 《「人生の花」相互鑑賞ワークシートより》

- ・根と茎・花の描き方と色がとても対象的で、アイデアがすごいと思いました。根はストローっぽい細い線で青、花と茎は明るい色で筆を使って描いています。さらに、花にはスポンジをスタンプのようにしてやさしいピンク色に仕上げています。全体的にも統一感がありバランスよく仕上がっています。
- ・「生まれて死ぬまで」という題名と、全体的に暗い色を使っていたので、人生の深さが表れていると思いました。一番上に青い月のようなものがあって、それもなんとなく深さをあらわしているように感じました。
- ・根っこのところはあまり大きく描いてなくて、茎のところから太くて長い茎になっているので、今を充実して生きているんだなと感じました。未来の花も、明るい色を使っているの、希望を感じました。

しかし、過去の経験から絵を描くことに苦手意識を強く持っていたり、自分に自信がなく、自分を表現することへの抵抗感を持っていたりするために、表現することを楽しめない生徒も一定数見られる。技能の優劣にかかわらず必要な資質・能力を養うために、完成作品の見栄えや完成度に捕らわれずに、身体感覚や行為を純粹に楽しむ中で、表現の意味や価値を自らが作り出せるような授業づくりをさらに推進していく必要性を強く感じている。

### [参考文献]

- ・新井哲夫編著『思春期の美術教育』日本文教出版、2018年
- ・大橋功、新関伸也、松岡宏明、藤本陽三、佐藤賢司、鈴木光男、清田哲男編著『美術教育概論』日本文教出版、2018年
- ・清田哲男、上田久利、大橋功、藤原智也編著『子どもが夢を叶える図工室・美術室』あいり出版、2018年